

論文内容の要旨

論文題目 「19 世紀ベルリン派と建築のポリクロミー」

氏名 齊藤 理

第 1 章 「ポリクロミー」とは何のことか 建築史のなかの色彩問題

先ず、建築と色彩との関係性、ポリクロミーの概念規定を記した後、ポリクロミー建築をめぐる研究史を概観することで従来の建築史研究の中では扱われてこなかった課題点を明確化させ、本研究の分析課題として呈示した。

・本論の分析課題：

1. ポリクロミーの問題が、19 世紀ドイツ建築においてどのように受容され、実践されたかについて考察。
2. ポリクロミーの問題を各建築家の作家性に帰するのではなく、時代的考察をも交えながら その特質を多面的に分析。
3. 細部装飾とポリクロミーとの関係性を検証。

・本研究で扱う時代区分： 19 世紀のベルリン建築アカデミーを中心とする「ベルリン派」における、シンケル派第 1 世代(主に 1800 年頃に生まれた世代で、1830 年代から 60 年代に活躍)からシンケル派第 2 世代(主に 1820 年代に生まれた世代で、1860 年代から 70 年代に活躍)に掛けての動向に焦点を当てることとし、これをケーススタディとしながら「なぜ建築家は色彩を施すのか」という本質的問題をも視野に入れつつ建築史的に考察する旨を明記した。

・分析に用いる資料は、主として当時彩色された図面資料とし、使用する図面資料、検索機関についても解説した。

第 2 章 規範の提示 シンケル作品のポリクロミー

19 世紀のベルリンにおける建築と色彩をめぐる状況を振り返りながら、K.F.シンケル(1780-1841)の建築作品に見られる色彩性をいくつかの作品事例を通して考察し、その特色と意義について論じた。

・その結果、シンケルがポンペイ装飾、ラファエロを範としたルネサンス装飾、ヘレニズム(古代ギリシア)起源の装飾等を直写するのではなく、独自の色彩的感性に基づいて作品化させていく 1810 年頃から 30 年代にかけての変遷が明らかになった。

・加えて、シンケルがパターンブックの使用に強い関心を寄せていたことを図面資料から実証すると共に、シンケルが見本帳の編集にも携わり、そうした資料を創作活動の源泉とする設計手法を開拓していた点を指摘した。

第3章 範型としてのポンペイ シュテューラーとシュトラック

ポンペイの多彩色装飾が、19世紀ベルリン派の建築家の間でどのように範型として受容され、応用されたのかをシンケル派第1世代に属する建築家 A.シュテューラー(1800-65)、J.H.シュトラック(1805-80)の彩色図面、月例設計競技作品、『建築スケッチブック』等の図面分析を通して論述した。

・殊にシュテューラーによる「クランツラーハウスの改修」(1835)、「新博物館」(1859)などの彩色図面の分析、同じくシュテューラーの論文「ポンペイにおける室内装飾について」(1840)の解説を通して、そのポリクロミー観が実作品にどのように反映されたのかを検証した。

・シュトラックの場合は、「ヴェーゲナー邸」(1840)、「ボルズィッヒ邸」(1868)等いくつかの邸宅建築内部の彩色計画図面を参照しながら、シンケルに影響された「繊細」な表現に包含する彩色法が確立されたことを跡付けた。

・その結果、シンケル派第1世代においては、シンケルの「古代ギリシア的ルネサンス」という多彩色装飾の特色を継承しながら、緻密で繊細に彩色することで、異なる様式をも一建築作品のなかで色彩的に融合させていく試みがなされていたことが明らかになった。

第4章 色彩装飾教育の確立 ベッティヒャーのテクトニック

シンケル派第1世代の建築家・理論家 K.ベッティヒャー(1806-89)の理論・実践両面の活動を詳細に分析し、ベルリン・アカデミーにおいて色彩装飾教育が確立されていく過程を明らかにした。

・その際、

1. ベッティヒャー自ら編纂した色彩装飾の見本帳
2. ベッティヒャーが自著『古代ギリシア人の構築術』(1844/52)で示した「テクトニック」論に基づく彩色法
3. 建築アカデミーを中心に行われた色彩装飾演習

という三側面を以って、ポリクロミーに関するある種の「超時代的(zeitlos)」な価値基準を有する新しい彩色法、装飾教育が確立されていったとする見解を示した。

・とりわけ、従来まったく検証されることのなかった、ベッティヒャーの指導の下に行われた色彩装飾演習(ゼメスターアルバイト)についても、ヘーリングなど当時の学生が残した演習図面を詳細に分析することで、ポリクロミーと細部装飾とをテクトニック論に基づき密接に関連付けていた当時の彩色教育の実態が明らかになった。

第5章 多様な試みの模索 「色彩の詩人」、グロビウス

シンケル派第2世代に当たる建築家 M.グロビウス(1824-80)の創作活動を振り返り、そのうちに、ベッティヒャーのテクトニック論に基づくポリクロミーとシンケルの繊細な多彩色とが共存しながら、多様性を模索する方向へ展開していたことを指摘した。

・グロピウスを含むシンケル派第 2 世代とベッティヒャーとの関わりを検証するため、19 世紀末に顕在化してくるベッティヒャーに対する批判的見解について再考し、それが「考古学的正当性の欠如」と「独善的な細部の表象」に起因することを指摘した。さらに、ベッティヒャーの評価をめぐって、19 世紀当時の歴史家 C.グリットと建築家 W.トゥッカーマンの間で闘わされた論争について明らかにしつつ、当時見られたシンケル派内の思潮的変容を跡付けた。

・グロピウスが記したポリクロミー論(1868)を解説し、そこに「色彩装飾の機能的独立」、「調和の問題」、「有機性の創出」が希求されていたことを明らかにした。

・そうしたポリクロミー観に基づいて様々に試みられた、独特の躍動性を備えた彩色事例、さらには「テクトニック・ポリクロミー」の建築事例を挙げながら、その特質を「軒蛇腹への塗色」、「テラコッタ装飾」、「スグラフィット装飾」、「マジョリカ焼きタイル装飾」の 4 つに分類しつつ解明した。

第 6 章 建築家の自由と能力 コルチャーからルーカエへ

B.コルチャー(1834-68)、R.ルーカエ(1829-77)らシンケル派第 2 世代のポリクロミーに対する意識が、第 1 世代のそれとは次第に乖離し、やがて、必ずしもシンケルやベッティヒャーの範に囚われずに、色彩独自の論理性から新しい彩色法を模索する動きへと移行していく過程を明らかにした。

・シンケル派第 2 世代のコルチャーがベッティヒャーの下で作成した装飾演習図面と、シュティーアーの影響を受けたネオ・ルネサンス的ポリクロミーとを比較考察し、上の過程を跡付けた。

・加えて、光や色の空間的効果について記したルーカエの示唆的な論文「建築空間の 4 つの効力」(1869)を解説した上で、実際の邸宅建築事例などと照合しながら、ルーカエが、色彩装飾の問題を「光の効果」や「色の主調性」などを手がかりに現実的感覚に近い三次元的空間性を伴った問いへと展開させた点を指摘した。また 1860 年代末に提示された色彩装飾の意義についても総括した。

・1870 年代に出された 3 つの論文、E.マグヌス「芸術的見地からみたポリクロミー」(1874)、W.v.ベツォルト「美術と工芸のための色彩学」(1874)、G.T.フェヒナー「多彩色の彫刻、建築に関する問題」(1876)から明らかになる、当時の色彩をめぐる認識の変容について、建築家の色彩を扱う能力が求められるようになった建築分野の変容と併せて論じた。

第 7 章 建築における色彩が意味するもの 「ブランデンブルク門」と「ボンペアヌム」、2 つの復元現場から

2002 年に完工した「ブランデンブルク門」と「ボンペアヌム」という 2 つの彩色復元事例を通して、建築と色彩の問題、19 世紀の建築家らが多彩色装飾を施した動機付けについて、さらには記念物保護とポリクロミーの問題に関して、第 2～6 章の考察を踏まえ総括的に論じ、本論のまとめとした。

・本論の分析課題第 1 に対する解として、ベッティヒャーが提示した「ポリクロミーの文法化」に沿って彩色法を規定化しようとする方向性が、やがて第 2 世代に至って、創造性を求める方向性へと変異してい

く流れを総括した。

・第2の解として、シンケルのポリクロミーが持つ有機性を継承したシュテューラー、シュトラック、ルーカエらの動きが、やがて「創作者」から「鑑賞者」へという色彩をめぐる思潮上の変容の動きに合流していった点を明らかにした。

・第3の解として、細部装飾の意義を明らかにし、細部にまで分析対象を拡げることで、19世紀におけるポリクロミーの問題を再考することができ、学究的な深化をもたらすことを指摘した。

>> 付属図版資料集 <19世紀建築と彩色図面>

本論文に付属する図版資料として、19世紀における彩色された建築・装飾図面をまとめて集成した。この図面編では、作者不明など匿名性の強い図面資料をも考察の射程に入れられるよう、作家性に囚われず網羅的に掲載した。

第8章（別章）装飾見本帳が建築へ及ぼす影響について

19世紀のドイツで編纂・刊行された多色刷りの装飾見本帳を概観しつつ、その変容過程、種別、用途について分析し、それら装飾見本帳が建築創作活動にどのように影響したのかを時間的変遷にしたがって考察した。

・その結果、19世紀の見本帳は、当初、ギリシアやポンペイ、あるいはイタリア・ルネサンス期といった、地域的にも時間的にも隔たりのある建築物の色彩性を記録、伝達し、受け手の側にある知悉を与えるための媒体として期待されていたのに対し、次第にシンケルやベッティヒャーといった同時代の個別の建築家による創作性を公にし、新たな創作を喚起させるような、言い換えれば、多方面の用途へ応用できる実用性が重視されるようになったという変容過程が明らかになった。